いわき生徒会長サミット　臨時全体ミーティング

学校建設へ前向きに取り組むことを確認

タイへの学校建設を目標に、本年度の活動を進める「いわき生徒会長サミット」の臨時全体ミーティングが6月30日、市生涯学習プラザで開かれた。各学校の活動状況を確認し、今後の活動について前向きに意見を交わした生徒たち。共通の目標に向けて懸命に取り組んだミーティングの様子を紹介する。

谷川理事長㊨の話を聴く生徒たち

▼タイへ学校建設を決めた生徒たち

同サミットは、市内の生徒会の交流を深め、リーダー育成を図ろうと、23年度にスタートした。本年度の第1回ミーティングは4月21日に開かれ、その場でタイのファイコン村への学校建設に取り組むことを決めた。

建設のために手を携えるのは、これまでにラオスやタイ、ベトナムなどの山岳地帯に約150校の学校を建設しているアジア教育友好協会（谷川洋理事長）。東日本大震災で支援を受けたことへの感謝を表し、復興へ向かう姿を全世界へ発信しようと生徒たちに学校建設を提案し、生徒たちも取り組むことを決めた。

谷川理事長は5月、ファイコンに飛び、現地の人たちと打ち合わせに臨んだ。「被災地の中学生がここに学校を造る」と伝えると、現地の人たちは当初、「うそだろう。できるわけがない」との反応を見せ、驚きをもって迎えられたという。

▼進ちょく状況の確認

ミーティングでは、谷川理事長が視察の状況などを説明。このあと、平、四倉・久之浜・好間・三和、小川・川前・遠野・田人、内郷・勿来、小名浜・常磐の5班に分かれ、班別にミーティングを開き、建設に向けた肝となる「ワンコインスクールプロジェクト」の取り組み状況を確認した。

このうち草野中では、谷川理事長による説明会を受けて、各クラスの委員長が学活の時間を使ってプロジェクトを説明したと報告。生徒集会を使って、生徒会役員がプロジェクトへの理解を深めてもらうための劇も上演。生徒たちの間には、「未来を担う自分たちがいわきのために頑張りたい」という機運が生まれてきたという。

このほかの学校では、中体連やテストなどのため、ほとんど活動が進んでおらず、学校間でのばらつきがあることが分かった。生徒たちは「文化祭で何かできないか考えたい」「どのように生徒全員に伝えるか、まずは役員の中で話し合いたい」など方針を示した。

▼ワンコインスクールプロジェクトについて

同プロジェクトでは、すでに2つの学校が完成している。単なる募金活動で建設資金を集めるのではなく、生徒1人ひとりの継続した取り組みを寄金へと変え、それを集めて建設資金にする。

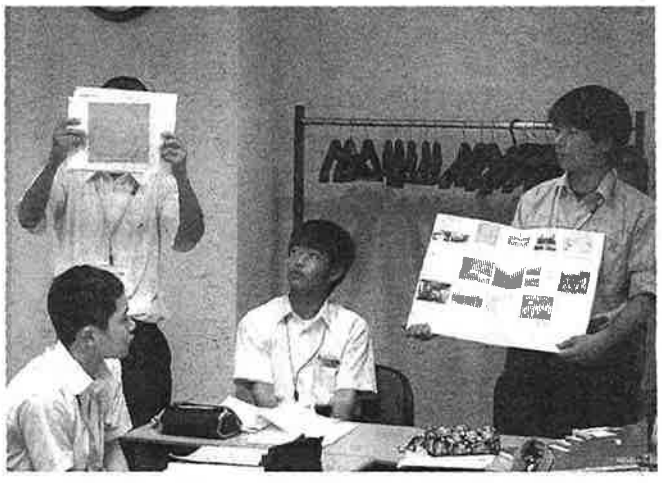
同プロジェクトの基本となるのが「カード運動」。生徒はまず、「英単語を50個覚える」「部活動の試合でファインプレーを達成する」「ボランティア活動を行う」などそれぞれの目標と、それを達成した際に自分でためる金額を設定する。目標や活動内容、金額はカードに書き入れ、目標に向けて取り組むとともに、目標を達成したら、小遣いの中から設定金額を寄金へと回し、最終的にワンコインの500円を目指す。

▼意欲を見せる生徒たち

各班でのミーティングが終わると、班の代表者が話し合いの結果を報告した。話し合いでは、進ちょく状況の確認以外にも、寄金額の集計の目標にしている9、12月までの活動スケジュールや、本年度も交流を予定している長崎県長崎市の中学生にも協力を求めるかどうかも話し合った。

各方部とも、具体的なアクションとして、プルタブやアルミ缶集めなどで基金を作るなどのアイデアを披露。また、長崎市との協力については、「より多くのお金が集まるのでは」という理由で協力を提案した班や、「いわきでまだ活動が根付いていないうちに協力を求めては、いわきでの活動が浅くなってしまうのではないか」と、安易に協力を求めることに否定的な意見も出た。

短い時間の中でも、建設しようとの共通の思いに向けて、自分たちにできることを模索した生徒たち。班別のミーティングでは、昨年のサミット参加者である高校1年生のシニア会員がファシリテーターとして、各生徒会長の意見を引き出し、まとめていた姿も見逃せない。


班別ミーティングで学校での実践例を説明した

また、各学校の生徒会担当教諭なども参加し、生徒たちが意見を交わす様子を見守っていた。班別の報告後、ある教諭が「学校を造ることは賛成だが、（目標を達成して金をためる）自己犠牲というやり方は納得できない」など、ミーティングのあり方や手法に対し、厳しい口調で見解を示し、谷川理事長へ質問を投げかけた。

目の前にいた生徒たちにとっては衝撃的な発言だったようで、青ざめた表情を浮かべるなど、顔色を曇らせ、熱気を帯びていた空気が冷え込んだ。谷川理事長はこれに対し、「サミットで決まったことが強制ではない。自己犠牲を強制するつもりもないし、自由意志だ」と述べるとともに、「子どもたちが自分たちでやろうとしていることに、学校がノーということもできないのではないか。この制度の中でどう支援していくか、協力してほしい」と応じた。

▼自分たちの目標を再確認

生徒たちは気を取り直し、本年度の生徒会長サミットの議長、副議長を決定した。自分の力を試したいなど、意欲的に手を挙げる姿が見られた。

話し合いの結果、本年度の議長には油座すみれさん（田人中）、副議長には合津彗太（三和中）、八島駿介（勿来二中）、伊藤峻（内郷一中）君が決まった。

議長としてあいさつする油座さん㊥

全体での話し合いを終え、谷川理事長は再度カード運動の意義などを説明。「学校、地域、教育委員会で強制するのではなく、自由意志で当事者でやる」と話すとともに、過去の実施校で見られた子どもたちの成長、親子の対話が進むこと、主体性を身に付けたなど、運動による副次効果を説明した。

「人さまのお金を募金するのではなく、何かいいことをして、小遣いの中から身を切る。ノーの理由はいくらでもつくれるが、イエスを貫くことは難しい。子どもたちは玉を持って走ろうとしている。先生も十二分に話し合って、アシストしてあげてほしい」

生徒たちは谷川理事長の言葉に、自分たちの夢を再確認し、目標に向けて動き出すことを新たに誓った。ある生徒は「お金が関係することで、大人の協力も必要だし、慎重にならなければならない。先生の意見も分かる。でも、私たちはタイの子どもたちのため、震災で支援してくれた人たちのために動きたい。難しいこともあるけれど、協力して学校を建設したい」とミーティングを振り返った。